

## 競合的パラダイム論からみる L. ロビンズの合理性と非合理性

L. Robbins' s Rationality and Irrationality from Competitive Paradigm Approach

田中啓太(尚美学園大学総合政策学部)

Keita TANAKA (Shobi University)

### 要旨

本報告は松嶋敦茂による競合的パラダイム論における近代的パラダイムのアプローチを踏まえながら L.ロビンズの合理性概念を検討する。競合的パラダイム論では、限界革命を境界に「古典」的パラダイムと「近代」的パラダイムを相互に非共役的なものとして位置づけており、社会的な再生産の過程に目を向ける「古典」的パラダイムに対し、「近代」的パラダイムの主眼は希少性に基づく個人の選択的行為のシステムに目を向ける。「近代」的パラダイムの方法論的特質は、ワルラス(L. Walras, 1834-1910), パレート(V. Pareto, 1848-1923), ロビンズ(L. Robbins, 1898-1984)らで特徴づけられており、ワルラスから始まる実証科学としての経済学の潮流であり、ロビンズは、通説の通り 1930 年代以降の主流派経済学の潮流の 1 つに位置づけられている。

競合的パラダイム論は、松嶋(2019)において更に検討が進められ、両パラダイムの対比を通じて、モラルサイエンスとしての経済学と実証科学としての経済学の関係性の検討へ進んでいる。そこでは近代的パラダイムの担い手の中に同パラダイムを超えうる観点が指摘されており、本報告はロビンズにおけるそれを確認する。ロビンズの合理性概念を踏まえると、彼の経済学を 1 次近似としての経済学と希少性定義としての経済学に区別して理解することが出来る。この整理はパレートが論理的行為－非論理的行為の類型に対応する経済学と社会学の区別に相似すると言える。本報告は、合理性概念の検討を通じて、非合理的な行動を経済学ではなく社会学で扱おうとしたパレートと、非合理性を彼の定義する合理性概念に含める形で希少性定義に基づく経済学を構想したロビンズとの相違を指摘する。

## I 競合的パラダイム論における「近代」的パラダイム

科学史として経済学史を捉えるアプローチの一つに、松嶋敦茂(1996, 2019)による競合的パラダイム論が挙げられる。1870年代の限界革命を1つの科学革命とみなすこのアプローチの特徴は、現代の経済学を1つの同質的な学説の集合体として見るのではなく、経済学における複数のパラダイムの競合的・補完的な関係性そのものに目を向ける点にある。T. クーン(T. Kuhn, 1922-1996)によるパラダイム論では、単一のパラダイムをもつ科学が「成熟した科学」であり、複数のパラダイムが共存している状態は「前科学的」とみなされる。しかし、社会科学としての経済学は常に単一のパラダイムに支配されているとは言えないため、クーンのモデルをそのまま経済学史に当てはめることには問題がある。そこで松嶋は I. ラカトシュ(I. Lakatos, 1922-1974)の「科学的研究計画」の方法を援用し、経験的な検証を必要としない堅固な核(hard core)と経験的事実によって検証され置き換えられている防御帯(protective belt)を踏まえながら、複数のパラダイムの競合的な併存関係を修正クーンモデルとして提示した。このモデルでは、各パラダイムはそれぞれの問い方における価値関心の違いなどから非共役的でありうるため、新しい支配的パラダイムは古いパラダイムを完全に包含しているとも限らない。それ故に、ラカトシュのように経験的事実の積み重ねから古いパラダイムが復権することも考えられる。このように松嶋の競合的パラダイム論の特徴は、クーンのパラダイム論にみられる単線的な発展観を修正し、理論の複数性や復権の可能性を視野に入れている点にある。

この競合的パラダイム論では、特に限界革命以前に生じた「古典」的パラダイムと革命以降以降の「近代」的パラダイムを対比的に取り挙げている。社会的な再生産の過程に目を向ける「古典」的パラダイムに対し、「近代」的パラダイムの主眼は希少性に基づく個人の選択的行為のシステムにある。「近代」的パラダイムの方法論的特質として、「方法論的個人主義」、「近代的主観主義」、「限界主義」が指摘されており、これらの特質を満たす経済学者としてワルラス(L. Walras, 1834-1910)、パレート(V. Pareto, 1848-1923)、ロビンズ(L. Robbins, 1898-1984)の名が挙げられている(松嶋 1996, 29)。経済システムを「希少性を基準とした諸個人の選択的行為のネットワーク」(松嶋・梅澤 2019, 20)として捉える「近代」的パラダイムは、上に挙げたワルラスから始まる実証科学としての経済学の潮流であり、ロビンズは、通説の通り1930年代以降の主流派経済学の潮流の1つに位置づけられている。

競合的パラダイム論は、松嶋(2019)において更に検討が進められ、持続可能性の観点やアリストテレスやマーシャル、センにみられる「活動」概念を巡る考察をも踏まえながら、両パラダイムの統合を模索し、経済学と倫理学との関係性の考察へ進んでいる。「古典」的パラダイムと「近代」的パラダイムは相互に非共約的で競合する関係にあるが、両パラダイムの対比を通じて、モラルサイエンスとしての経済学と実証科学としての経済学の関係

性、ひいては倫理学と経済学の関係性が検討されている。そこでは、持続可能性の観点やアリストテレスやマーシャル、センにみられる「活動」概念を巡る考察をも踏まえながら、両パラダイムの統合を模索し、経済学と倫理学との関係性の考察へ進んでいる。

ここで注目したいのは、限界革命以降の主流派経済学の担い手が、先に述べた近代的パラダイムの方法論的特質だけで説明される訳ではないという点である。例えば、近代的パラダイムの成立に寄与したマーシャルにおいて、「活動」の概念や経済生物学の試みなど近代的パラダイムの枠組みを超える観点が存在することが既に指摘されている(松嶋1996, 92)。これと同様に、社会経済学を構想したワルラスや、非合理的行為を重視して社会学研究へ移っていった後年のパレートの立場は、近代的パラダイムから古典的パラダイムへ接近するための足がかりと見ることができる。本報告では、ロビンズにおいてこうした近代的パラダイム観を超える枠組みが見られることを検討する。

## II 問題の所在

近代的パラダイムは何らかの目的合理的行為の類型を特徴とする。しかし、上に挙げた同パラダイムの担い手が論じる合理的行動について詳細を見ていくと、近代的パラダイムの枠組みを超える観点が浮かび上がってくる。例えば、選択理論や無差別曲線分析と結び付けられて理解されるパレートだが、『一般社会学提要』において彼は経済学と倫理学、社会学との総合を試みている。パレートの捉える社会システムは①残基(社会心理的要素)、②利益(経済的要素)、③派生(イデオロギー的要素)、④社会的異質性とエリート  
の周流、の4つの要素で特徴づけられており、社会システムの一部である②に経済システムが位置付けられている。この経済システムの構成分子が個人の合理的行為の類型であり、パレートにおいては論理的行為と呼ばれる。ところが後年のパレートは、社会システム全体においては、個人行動の多くは論理的行為ではなく非論理的行為が支配的であるとの見解に至る。

「パレートは、後年の社会学では、人間の行為の主要な部分は非論理的行為だと述べている。となると、経済学と社会学の統合は困難になってしまう。それを解決する方法には2つあって、1つは経験的方法、もう1つは先験的方法である。経験的方法というのは非論理的行為を残余カテゴリーとしてではなく内容的に説明してゆくもので、実際『経済学提要』では非論理的行為を反論理的行為と区別している。前者は、論理以外の方法によって推論すること、たとえば判断がつかないときにサイコロを振って決めるようなものも含まれる。したがって、科学によってもっと追求すれば論理的手段が見出される可能性をもっているけれども、結果的には同じ選択がなされることもある。

反論理的行為にはそうした可能性はない。こうして、非論理的行為には論理的行為に限りなく近いものからずっと遠いものまで広く分布が見られる。ケインズの血気やサイモンの限定合理性なども非論理的行為に含まれるわけである。こうして経済学の範囲を反論理的なものを排除した非論理的行為にまで拡張すれば、社会学との統合も見えてくる。」(松島・梅澤 2019, 48)

パレートにおける論理的行為とは、あくまでも経済システムにおいて利益や経済的欲望を追求する人間の行動に反復的に現れる第一次近似である。この論理的行為の類型によって、所与の制約条件の下で自らの選好(目的)を最も効率的に充足する手段を選択する個人から成る経済システムが成り立つが、しかし社会システム全体に目を向ければ、非論理的行為が支配的な類型となるため、論理的行為による説明は極めて限られたものとなる。このようにみると、個人行動の合理性—非合理性(パレートにおいては、論理的行為—非論理的行為)を巡るパレートの観点は、彼の純粋経済学と社会学との領域の区別に対応するものである。

本報告は、こうした合理性—非合理性と経済学の領域を巡る観点がロビンズにもみられることを指摘する。一般的に純粋経済学の潮流に位置付けられるロビンズだが、本報告では彼の合理性概念を詳細に検討することによって、ロビンズの方法論的な射程は純粋経済学だけではなくより広い領域へ及ぶことを示すことができる。この点についてパレートとの対比を通じて検討してみたい。

### III ロビンズにおける「合理性」と「非合理性」<sup>1)</sup>

稀少性に基づく選択行為についての科学として経済学を定義したロビンズもまた、経済学に合理的行動の形式を見出している。しかし、以下に確認するようにロビンズの「合理性」にはいくつかの段階があり、近代マイクロ経済学にみられる選好の推移性や合理的経済人という形式からではロビンズの合理性の正確な姿をつかみにくい。

合理的経済人の仮定や選好の推移性を意味する完全な合理性の仮定について、ロビンズはこれらの仮定の形式的な意義を認めている。このロビンズの一側面は、ロビンズに影響を与えたと考えられる L. v. ミーゼスや P. H. ウィックスティードのように、経済人の仮定を明確に拒絶する立場とは異なる。ただしロビンズは、経済人の仮定を説明のために用いられる第一次近似に過ぎないものとみなす(Robbins 1935, 97 / 訳 147-148)。これは

---

<sup>1)</sup> ここでは、近代マイクロ経済学の観点から合理的経済人の条件を満たさないものを「非合理的」と呼ぶ。

経済人の仮定を積極的に採用するのでも拒絶するのでもなく限定的な用法のみを認める立場であり、塩野谷(2009)が指摘するような擁護する立場だといえよう。

合理的経済人の検討とは別に、ロビンズは、稀少性定義に含意される合理性の概念について、①「倫理的に妥当な ethically appropriate」行動、②「矛盾がない consistent」行動、③「目的のある purposive」行動の 3 つを挙げて検討している(Robbins 1935, 91-94 / 訳 138-143)。①については経済学と倫理学を区別するロビンズの立場から拒絶される。これに対して②行動の無矛盾性(選好の推移性<sup>2)</sup>)という意味の合理性は「この種の仮定がまさしくある種の分析的構造にはいつてくる」(Robbins 1935, 91-92 / 訳 139)ことを認めるが、行動に完全に矛盾がない状態のみの説明に経済学が限定されることを避け、②の意味における合理性を一旦保留する。

「完全な合理性の仮定がこの種の構造にあらわれるということは全く正しい。しかしながら、経済学的一般法則は、行動に完全に矛盾がない事態の説明に限られる、というのは正しくない。たとえ目的に矛盾があっても手段はその目的に関して希少であるかもしれない。交換・生産・変動—すべては、人々が自己のなしつつあることの意味内容を完全には知っていない世界におこるのである。消費者の需要を最も完全に充足することと、関税あるいはこの種の障害によって外国商品の輸入を阻止することを同時に望むことはしばしば矛盾する(すなわちこの意味において不合理である)。しかもそれはよくなされることである。この場合経済学はその結果生ずる事態を説明する資格がない、とだれがいうであろうか？」(Robbins 1935, 92-93 / 訳 140-141)

稀少性に基づく「目的—手段」行動によって経済学を構築していく上で、上記の通りロビンズは、目的に矛盾があるような行動をも含める形で議論を行っている。またそうした行動は、完全予見や完全知識の仮定も置かれていない。このようなロビンズの立場は、ミーゼスやウィックステッドのような、選好の無矛盾性を仮定しない立場と共通する。

最終的にロビンズは、「人間の行動が経済的側面をもつ前に少なくともなにかの合理性が仮定される、と正当に論じうる意味」(Robbins 1935, 93 / 訳 141)として③「目的のある purposive」という意味の合理性を指摘する<sup>3)</sup>。これは、経験的な事実から構成される稀少性定義において「目的—手段」行動が仮定される段階で含意される合理性であり、経済人の仮定のような第一次近似における合理性概念と区別することができる。換言すれば、経済人モデルから非合理的とみなされる行動の一部—完全予見や選択の無矛盾性の条

---

<sup>2)</sup> ロビンズ(1935, 91-92 / 訳 139)を参照。

<sup>3)</sup> 「purposive」に合理性の概念をみる研究については、Ross(2007)、Oliveira and Suprinyak (2018)を参照。

件を満たさない行動—も、ロビンズにおいては目的があるために「合理的」とみなされるのである。

以上を踏まえると、ロビンズの経済学は合理性概念について段階を分けて整理することが出来る。それは、経済人モデルによって厳格な合理性を仮定する第 1 次近似としての経済学の側面と、経済人の観点からは「非合理的」と考えられる行動をも含む稀少性定義<sup>4)</sup>に基づく経済学の側面の 2 つである。近代的パラダイムの特質と合致するのは前者であるが、ロビンズの主眼は後者の経済学に置かれていたと考えられる。

また、ロビンズが『経済学の本質と意義』の中で展開した合理性概念についての議論は、最終的にロビンズ自身の価値判断と接続する。

「経済学は、追求される諸目的が相互に矛盾しないという意味において行動は必然的に合理的である、と偽って述べているわけでは決してない。…それは、個々人はつねに合理的に行動するという仮定に全く依存しない。けれどもそれは、その実践的な存在理由によって、かれらがそうすることが望ましいという仮定にまさに依存するのである。それは、必要の範囲内において、調和的に達成されうるような諸目的を選択することが望ましい、ということをもまさに仮定するのである。／そして以上のようにして、結局、経済学は、その存在のためにはなくても少なくともその意義のために、まさに究極的な価値判断 (ultimate valuation)—合理的なこと、および、知識をもって選択しうること、が望ましいという断言—に依存する。」(Robbins 1935, 157/ 訳 237. /は改行を示す.)

ここでは、合理的な選択行為の形式が満たされることを仮定するのではなく、その形式の望ましさを仮定するとロビンズは述べている。ロビンズが稀少性定義によって捉えている人間の「目的—手段」行動は、無矛盾性の基準を必ずしも満たさないかみしれず「非合理的」な行動でありうるが、そうした諸行動が矛盾の無い行動に改められていくことは望ましいことである、とロビンズは指摘している。この「望ましさ」とは、経済学の体系から導かれた教義ではなく、ロビンズ自身もつ価値判断の現れである。実証科学としての経済学の潮流において、ロビンズは経済学から価値判断を放逐した人物として批判されてきたが、彼自身は自らの価値判断に立脚していることを明示している。

#### IV 合理性概念と経済学の領域

---

<sup>4)</sup> 田中(2020)では、ロビンズが用いる諸仮定を基本仮定と副次的な仮定に区別した上で、1次近似の経済学と稀少性定義の経済学を区別している。

ここまで述べてきたロビンズの合理性と経済学の段階について、パレートの論理的行為の類型を借りながら整理したい。第一に、両者とも厳格な意味での合理性を仮定する経済学の領域を示している。パレートは厳格な合理性概念として論理的行為(目的合理的行為)を定め、純粋経済学を展開した。他方でロビンズは、同様に厳格な合理性である合理的経済人の仮定を擁護する。また、こうした厳格な合理性概念に基づく経済学は、両者ともに第1次近似と見なしていることも共通する。

第二に、両者とも厳格な合理的行動の類型に当てはまらない要素、つまり「非合理的」な要素が人間行動に見られ、それが一般的であるという視点をもっている。パレートにおいてそれは非論理的行為(論理的行為の補集合)として定式化され、経済学の外側である社会学の領域に置かれた。他方でロビンズは、「非合理的」な要素を含む人間行動をも「目的のある purposive」という意味において「合理的」とみなす。完全予見や選択の無矛盾性が現実的な経験のうちに広くみられる条件でないことはロビンズにも明らかである。以上を踏まえると、人間の行動を「合理的」なものと「非合理的」なものに大別したとき、後者を重要視する人間観がロビンズとパレートに共通していると言える。

こうした共通の人間観に立脚するにも関わらず、人間行動のどの部分までを経済学で説明しようとしたかについて、つまり経済学の領域と人間行動を巡る問題について両者は異なっている。パレートは論理的行為の類型によって純粋経済学を構築し、より一般的な人間行動の様相である非論理的行為の類型を扱う領域を、経済学ではなく社会学に求めた。これに対してロビンズは、「非合理的」な行動の一部に合理性の枠組みを与え、これを稀少性定義としての経済学の領域に取り入れた。このように、ロビンズとパレートにおける合理性概念についての検討によって、「非合理的」な行動を扱う社会学の領域を展望したパレートと、「非合理的」行動をも経済学に取り入れようとしたロビンズとの隔たりを明確化することができる。

## V 倫理学と経済学を巡って

パレートとロビンズにみられる特徴は、経済学の観点から人間行動の類型として、合理性の基準を満たす行動だけでなく、この基準を満たさない非合理的な行動の側面を見出している点である。パレートは論理的行為と非論理的行為を区別し、ロビンズはまた前者の基準として第1次近似として完全に合理的な行動の段階があることを指摘しつつ、例えば選好の無矛盾性の条件を満たさないような後者の行動をも経済学で説明しようとする。ここには、社会システムの一部を扱う領域として純粋経済学を明確化したパレートと、パレ

ート比較して人間行動のより多様な側面を経済学に取り入れたロビンズとの違いを指摘することができる。論理的行為の類型によって経済学を精密に限定するパレートと、非合理性も含めた稀少性に基づく行動を対象とすることで経済学をより広く捉えようとしたロビンズとの相違点は、彼らの人間行動の類型によって説明することができる。

両者は、[合理的—非合理的]の間の様々な様相をみせる人間行動のどこまでを経済学の分析対象として抽出したかについて異なる。近代的パラダイムの観点がもたらす限界革命以降の選択理論の方法論的特徴によって、両者の相違点はより明確化することができる。論理的行為が定義されるからこそ非論理的行為が明示できるように、合理性概念の検討によってロビンズの非合理的(ロビンズの意味では「合理的」)な側面を明らかにすることができる。もちろん競合的パラダイム論は万能ではない。しかし、「近代的パラダイムだからこそ『不確実性』のもとでの『選択行為』という経済活動、ひいては動物でも神でもない人間の営みだからこそその必須の側面に光を当てられるところもあった」(松嶋 2019, 46)とあるように、経済学と倫理学を巡る問題において、パラダイム論に基づく検討は大きな意義があると考えられる。



参考文献

- Caldwell, B. J. 1982. *Beyond Positivism Economic Methodology in the Twentieth Century*, Allen & Unwin, 堀田一善・渡部直樹監訳『実証主義を超えて—20世紀経済科学方法論』中央経済社, 1989.
- . 2005. *Hayek's Challenge An Intellectual Biography of F. A. Hayek*, The University of Chicago Press.
- Hands, D. W. 2001. *Reflection without Rules*, Cambridge University Press.
- Herford, C. H. 1931. *Philip Henry Wicksteed His Life and Work*. London: J. M. Dent & Sons.
- Howson, S. 2011. *Lionel Robbins*, Cambridge University Press.
- Mises, L. 1966. *Human Action: a treatise on economics*. 3rd ed. Chicago: Contemporary Books, Inc. 村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社, 1991.
- Musgrave, A. 1981. 'Unreal Assumptions' in Economic Theory: The F-Twist Untwisted, *Kyklos*, 34(3): 377-387.
- Oliveira, Thiago. Dumont, and Suprinyak, Carlos. Edoardo. 2018. The Nature and Significance of Lionel Robbins' Methodological individualism. *Economia*, 19(1): 24-37.
- Pareto, V. 1920. *Compendio di sociologia generale; per cura di Giulio Farina*, Firenze. 姫岡勤訳・板倉達文校訂『一般社会学提要』名古屋大学出版会, 1996.
- Parsons, T. 1977. *Social Systems and the Evolution of Action Theory*. New York: Free Press. 田野崎昭夫監訳『社体系と行為理論の展開』誠心書房, 1992.
- Robbins, L. 1932. *An Essay on The Nature and Significance of Economic Science 1st ed*, Macmillan. 小峯敦・大槻忠史訳『経済学の本質と意義』京都大学学術出版会, 2016.
- . 1935. *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 2nd ed, London: Macmillan. 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957.
- Ross, D. 2007. Robbins, positivism and the demarcation of economics from psychology, F. Cowell, A. Witztum (Eds.), *Lionel Robbins' Essay on the Nature and Significance of Economic Science. 75th Anniversary Conference Proceedings* : 120-151.
- Wicksteed, P. H. 1888. *The Alphabet of Economic Science*, London: Macmillan.
- . 1933. *The Common Sense of Political Economy, and selected papers and reviews on economic theory*, G. Routledge.

- 川俣雅弘. 2007. 「パレートの『経済学提要』と 20 世紀マイクロ経済学の展開」『三田学会雑誌』99(4): 657(51)-679(73).
- 佐々木憲介. 2002. 「古典派の経済人概念」『経済学史学会年報』41(41)71-79.
- 塩野谷裕一. 2009.『経済哲学原理 解釈学的接近』東京大学出版会.
- 田中啓太. 2014. 「ウィックスティードからロビンズへ : 方法論と人間観から見る類似性」『経済科学』(名古屋大学大学院経済学研究科) 61(4): 51-69.
- . 2018. 「L.ロビンズの経済学における行動モデルの検討 : 合理的な経済人と稀少性定義の距離」『尚美学園大学総合政策論集』(27): 75-93.
- . 2020. 「L. ロビンズの経済学方法論にみる二種の仮定」『経済科学』(名古屋大学大学院経済学研究科) 67(3): 115-129.
- 長尾伸一・梅澤直樹・平野嘉孝・松嶋敦茂編著. 2019. 『現代経済学史の射程:パラダイムとウェルビーイング』ミネルヴァ書房.
- 松嶋敦茂. 1985. 『経済から社会へ パレートの生涯と思想』みすず書房.
- . 1996. 『現代経済学史 1870-1970 —競合的パラダイムの展開—』名古屋大学出版会.
- . 2005. 『功利主義は生き残るか—経済倫理学の構築に向けて—』勁草書房.